

Sustainability から Regeneration へ ～ Zero Waste Design の実現に向けて～



講師 石坂 典子 氏 (イシザカ ノリコ)

石坂産業株式会社 代表取締役

日時：10月12日(水) 18:00～19:30 開催形式：対面 / Zoom ウェビナー

講演会出席者：135名

講師略歴 高校卒業後、米国の大学へ留学。帰国後、父親が創業した石坂産業へ入社し「廃棄物ゼロの社会をつくりたい」という創業者の強い想いに共感し会社を継ぐことを決意。2002年に社長就任。地域に愛される企業となるため、プラントの全天候型化、ISO7種統合マネジメントシステム導入、見学の受け入れといった改革を断行。現在では年間約5万人が来場する。新たなビジョン「Zero Waste Design」を掲げ、産業廃棄物中間処理業で減量化・リサイクル率98%を達成。循環型社会を目指し東京ドーム4.5個分の敷地を誇るサステナブルフィールド「三富今昔村」を運営しESDプログラムを提供している。

講演要旨

はじめに

私は今年で55年目になる父の会社を継いだ2代目。高校卒業後に米国の大学へ留学し、帰国後の1992年、父が創業した石坂産業へ入社。2002年、社長に就任した。

石坂産業は産業廃棄物の処理をする会社である。この仕事はネガティブな印象のほうが強く、3Kと呼ばれることも多いが、私たちは創業以来、循環型経済に貢献するべく、「どこかの企業の廃棄物をどこかの企業の資源にする」活動を続けてきた。同時に、環境教育活動やファーム活動(有機農業)も行っている。

私は環境事業者なので、今日はみなさんにウェルビーイングという視点と視座で聞いていただきたいと思う。学生のみなさんは、これから多様性の社会の中に出ていく。その中で仕事をすうえで、「ウェルビーイング=私たちの健康と安全は、健全な地球環境があってこそ成り立つ」という感覚を持っていただけたらと思う。

石坂産業の社員について

当社は社員数が約190名で、女性は約30%。廃棄物を選別する力仕事のため男性が多いが、女性の管理職が半数を超えている。年齢層は20～30代が30%、40代が32%、50代が18%で、多様な年齢の社員が働いている。

今、多くの企業がこの「エイジダイバーシティ=年齢の多様性」を企業の競争力にする、という考えを持っている。多様な年齢層があるという企業文化の中で、働く一人ひとりが活躍できる場を見つけられるとよいのではないかと私自身も思っている。

また、働くうえでのウェルビーイングとして「積極的に自分の意見を言える環境」も重要であり、「明るく透明感のある企業文化」が大切だと考えている。

リサイクルや環境配慮への挑戦

当社が主に扱うのは、建設系の廃棄物。そして、その廃棄物の再資源化に取り組んでおり、減量化・再資源化(リサイクル)率98%を達成している。

建設系廃棄物は、世界ではほとんどが埋め立てされており、課題となっている。非常に注目されている分野で、当社にもコロナ禍前は世界40カ国以上から視察に来ていた。

一方、国内において建設系廃棄物は、最も不適正に処理されやすい廃棄物ともいわれる。住宅は長期にわたって住むものであり、その間に持ち主が変わることもある。また、年数が経って製造者や材料がわからなくなり、不適正な処理につながりやすいという課題もある。

私たちの工場では、環境に配慮した活動を積極的に行っている。AmazonとGlobal Optimizmが共同で立ち上げたThe Climate Pledge（気候変動対策に関する誓約）に日本で初めて手を挙げ、全工場を再生エネルギーで回すということもしている。さらに、太陽光や地中熱、雨水、風力など、あらゆる自然なものを使用して循環させるという活動に挑戦している。

石坂産業の足跡

石坂産業は1967年に父が創業したのが始まり。父は埼玉県の農家に四男として生まれ、15歳で東京に出てさまざまな仕事に就いたのち、自分で事業を興そうとダンプを買って土木の手伝いを始めた。当時は東京オリンピックが終わり、都心に高層ビルが建ち並び始めた時代。小さな住宅が取り壊され、産業廃棄物として夢の島に運ばれて、海洋投棄されていた。父はダンプで産業廃棄物を運びながら、「まだ使えるものがあるのにもったいない。こんなことを続けていいのか」との思いを強めていく。そして27歳の時、「資源がないこの国で、平然と使えるものが捨てられていてよいのか。ゴミをゴミにしない社会をつくりたい」と現在の事業を興した。

私は留学から帰国後、ネイルサロンを開きたいと思い、当初は開業資金を貯める目的で石坂産業に入社した。当時、私は事務仕事をしていたが、作業員の姿を見て大変な仕事だと実感した。1日300台ものトラックが運び入れる廃棄物を、雨の日も、冬の寒い日も、夏の暑い日も、手作業で仕分けしていたからだ。しかし、顧客からの電話は「値段を下げてほしい」というものばかり。不要なものだから、安く、できればタダで処理したいと。

また、地域の人々から「汚くてキツくて危険な仕事だ」と思われているとも実感した。父は「ゴミをゴミにしない社会をつくりたい」と夢見ていたが、その想いは地域社会に届いていないと感じた。

そんな中、1999年に所沢ダイオキシン問題が発生し、当社に対して焼却反対運動が起きた。父は1997年に15億円を投じてダイオキシンが出ない焼却炉を設置していたが、その事実は理解されず、反対運動が起きてしまった。

それでも父は「この仕事を続けたい」と言う。私は「仕事を続けるためには、地域に愛され、社会に必要とされる企業でなければならない」と思った。そして、それを実現するために社長にならせてほしいと頼んだ。父は渋ったが諦めずに説得を続け、2002年、30歳で代表権のない社長に就任した。

社長就任後の取り組み

社長就任後、まず行ったのは全天候型プラントの建設。地域への配慮と、働く人たちの労働環境改善を目指し、40億円を投じて建て替えを行った。

一方で、働く人たちの意識改革にも取り組み、まずは挨拶の練習から始めた。「迷惑産業」という業界イメージを変えるために顧客にも働きかけた。

また、国際規格ISO認証も取得。認証は「取ること」よりも「取るプロセス」に価値がある。何のために品質を守るのか、なぜ労働安全衛生が必要なのか、といったことを国際的な視点で社員に理解してもらおうきっかけになるからだ。

2008年には2億円を追加投資して工場見学通路を設置。私たちの工場見学は顧客獲得に結び付くものではない。それでも実施するのは、「誰かがやらなくてはいけない仕事がある世の中にある」ことを知ってほしいからだ。昨年だけで約6万人の見学者があり、学校のフィールドワークや社会見学にも活用されている。

三富今昔村について

当社では「三富今昔村」というサステナブルフィールドの運営も行っている。会社周辺はもと三富新田という集落であり、循環農業が行われていた。しかし、昭和の頃から集落内の

雑木林が放置され、生物多様性の崩壊が起きるとともに不法投棄も増えていった。

私たちはまず、ボランティアで雑木林の清掃活動を行い、20年間で東京スカイツリーの高さを超えるゴミを集めた。さらに、森そのものを管理させてほしいと地権者に頼み、生物多様性が保持できる森づくりに挑戦した。そして、日本生態系協会「JHEP」認証の最高評価AAAを取得。「AAAの森をつくる会社」と呼ばれて見学が加速的に増え、今では年間約5万人が訪れるようになった。

「三富今昔村」は環境省の「体験の機会の場」にも認定されており、地域の子どもたちだけでも年間5,000人超が学校の授業の一環として訪れる。子どもたちが来てくれることで、働く社員の意識も変わった。改めて自分の働き方、働く意味、会社の目指すものに意識が向き、それがやりがいにもつながっている。

石坂オーガニックファームについて

当社では「石坂オーガニックファーム」も運営しているが、オーガニックが目的ではない。あらゆる生物を育む土、大地について考えるためにやっている。私たちが受け入れる廃棄物の中には、リサイクルできないものや有害なものもあり、埋め立てると200年以上分解されずに土の中に残ることもある。しかし、それらがどういう影響を与えるかということは誰も教えてくれない。ファームでの農体験を通じて、「未来に残していきたいと思えるもの」を感じてほしいと考えている。

石坂産業が目指す未来

私たちは「Zero Waste Designの実現」というビジョンを掲げ、「SustainabilityからRegenerationへ」を目指している。

なぜ廃棄物中間処理業者の私たちが里山の管理・保全をするのか。経営者の方々はご存じと思うが、これからの社会には「経済価値と社会的価値の両立」が求められる。私たちも、「自然と美しく生きる、つぎの暮らしをつくる」ための社会活動をしていきたいと考えている。

Zero Waste Designを掲げる理由としては、世界人口の増加とともに廃棄物が加速的に増え、2050年には現在の2倍の廃棄物が地球を覆うと予測されているからだ。現状、日本の循環利用率（再利用・再生利用率）はわずか16%。このまま埋め立てを続ければ、日本も世界も埋め立て地がなくなる。廃棄物を残さないように循環させて、地表にあるものを何度でも活用する、ということを誰かがやらなければならない。

新たな5分野FAANG2.0

これからのビジネス界が目指するのは新たな5分野「FAANG2.0」である。Fuels（燃料）、Aerospace（航空・防衛）、Agriculture（農業）、Nuclear（原子力）、Gold（金属・鉱業）を意味し、これらを持続可能な仕事にしていくべきだといわれている。

燃料は今後、自然を活用したエネルギーに置き変わり、日本でも太陽光発電や風力発電が増えていだろう。それは大切な活動だが、一方で課題もある。たとえば太陽光パネルは、メーカーによってサイズやガラスの組成が異なるため、廃棄後にもう一度原料に戻すことが非常に難しい。「その製品は廃棄される時のことを考えて設計されているか」ということも今後は重要な課題となってくる。

Zero Waste Design

近年、今までのワンウェイ社会をやめて、循環型経済にしていこうという流れが加速度的に進んでいる。Zero Waste Designは、まず「ゴミにならない素材開発・構造設計」から始まる。モノは消費され、いつか不要になる。私たちは20年後、30年後に向けてどんなモノを作り、どんなモノを残していくのか。廃棄されることを想定して設計デザインする、ということをやっていかなければならない。

スマートプラントに向けた協業

プラントの効率化や安全性の向上に向けて、ITを活用したスマートプラントの開発に取り組んでいる。日本電気株式会社・インテル株式会社との3社協業により、搬入された廃棄物の容積をレーザーセンサーで自動計測する技術などを開発した。また、東急建設株式会社と共同で廃棄物選別ロボットの開発も行っている。

Vision Book

2018年、社員に向けてVision Bookを配布し、「100年企業になるために、私たちがすべきこと」を共有した。未来は予測するものではなく、私たちが創り出すもの。そういう想いを持ち、自分たちにできる小さなことから取り組んでいきたいと思っている。

会社の社員食堂では、マイボトルやマイ箸、マイ井などを持参すると割引が受けられるようにした。毎日の食事を通じた廃棄を減らす、といったことからできることもあると思う。簡単ではないかもしれないが、少しずつ意識を変えていけたらと思う。

里山×温浴事業 自治体の最終処分場跡地を有効活用

今、取り組んでいるのは里山×温浴事業。会社の隣地に清掃工場の跡地があり、たくさんの廃棄物が埋められていた。それを掘り起こし、そこにも里山を再生しようとしている。その里山と温浴施設を組み合わせ、大人のための五感体験フィールドを作ろうとしている。

おわりに

繰り返しになるが、「私たちの健康と安全は、健全な地球環境があって成り立つもの」。学生のみなさんがこれから就職活動をする時には、自分がどんな仕事を通して社会に、そして地球に貢献していくかということを考えてビジネスステージに入っただけだったらと思う。